

一、はじめに

1895年7月15日に、植民地政府が宜蘭支庁立明治語学校で、7月16日に芝山岩学務部学堂で台湾人に対する日本語教育を始めてから、2005年でちょうど、台湾日本語教育実施110周年を迎えることになった。この110年の台湾日本語教育の歴史を振り返ってみると、いろいろバラエティに富んだ現象が考察される。教育目標から見ても、教育内容から見ても、学習者数から見ても、教師の国籍から見ても、教材から見ても、大昔と21世紀初頭とでは、だいぶ相違点が挙げられる。また、統治者や施政者の方針や思考様式によって、日本語教育の政策は違うわけである。

一体、各時代におけるそれぞれの日本語教育政策は、どのような台湾人の日本観を表しているのか、そして、21世紀初頭の現在の日本語教育政策は、いままでのそれとはどのような異質を呈して、どのような現在台湾人の日本観を表しているのか、考察してみたいものである。

二、台湾と日本・日本語教育との出会い

(一) 台湾と日本との出会い

日本に領有される前の、台湾と日本との出会いは次のように整理される。1592年、日本海賊「倭寇」が雞籠、淡水などを侵した。1593年、豊臣秀吉は家臣を派遣して高砂国（16世紀、台湾に対する日本側の呼び方）に納税するように催促したが、任務を遂行できなかった。1609年、有馬晴信が徳川家康の命令で台湾に出兵して原住民を拉致した。1616年、長崎代官村山等安が徳川幕府の命令で台湾に遠征したが、台風で失敗に終わった。1626年、日本朱印船船長濱田彌兵衛が台湾に来て、オランダ人と争いを起こして、しばらく台湾にいたが、1627年に、台湾代表一新港社番16名と漢通事2名を連れて日本に帰国した。1628年7月3日、濱田彌兵衛がオランダ人の大員長官ヌイツ（Pieter Nuyts）と和平条約を締結した。1871年11月6日、八瑤湾に漂流した琉球人が牡丹社原住民に殺害された。1872年5月22日、日本通訳官水野遵が来台。7月28日鹿児島県参事大山綱良が台湾に兵を出すように建白した。10月20日日本内閣が台湾出兵を決議した。1874年5月22日、日本軍が台湾に来て「牡丹社事件」を起こし、九ヶ月間台湾に滞在した。

1895年4月17日、日清戦争で日本に負けた中国は台湾を日本に割譲した。それで、第二次世界大戦終戦の1945年までの50年間、台湾は日本の統治下にあった。終戦の1945年から1972年まで、台日間は国交があり、政治、経済、文化などの交流をしたが、日本の中国承認のために、台湾と日本は国交断絶のはめになった。しかし、歴史的にも地理的にも、切られない関係にある両国なので、2006年現在では、未だにいろいろな方面において交流が続けられている。そして、尖閣諸島の領有権問題とか排他的経済水域問題などが国交のないために未解決のままである。

「コロンブスが1492年に新大陸を発見した」という言い方で分かるような、弱肉強食の世界的共通原理から見れば、当たり前かもしれないが、同じ島国同士の台湾と日本の出会いを史的に見てみると、あまり友好的なものとはいかぬ。それに、台湾は殆どと言っていいほど、一方的に日本に制圧される立場に置かれているような気がしてならない。

(二) 台湾と日本語教育との出会い

前述したように、1895年5月、中国が日本に負けたイケニエとして、台湾が植民地として日本に割譲された。6月17日に台湾総督府で始政式が挙げられ、18日に大稻埕において台湾総督府学務部の事務が伊澤修二によって始

められた。7月15日より宜蘭支庁立明治語学校で授業が開始され、7月16日より芝山岩学務部学堂で日本語の授業が開始されたが、それが台湾日本語教育の濫觴である。それからの50年間、日本植民地政府が学校教育を通して台湾で日本語教育を施した。その時期の日本語教育は、次のように区分される。

- (1) 日本語教育の模索時代 (1895-1919)
- (2) 日本語教育の確立時代 (1919-1922)
- (3) 日本語教育の内台人共学時代 (1922-1943)
- (4) 日本語教育の義務教育時代 (1943-1945)

そして、終戦の1945年から2005年の今日までの60年に亘る台湾日本語教育は、次の時期に分けられる。

- (1) 日本語教育の過渡期 (1945-1947)
- (2) 日本語教育の暗黒期 (1947-1963)
- (3) 日本語教育の転換期 (1963-1980)
- (4) 日本語教育の開放期 (1980-1989)
- (5) 日本語教育の飛躍期 (1989-1996)
- (6) 日本語教育の多岐期 (1996-現在)

三、台湾における日本語教育政策

本稿では、台湾日本語教育における時代区分を執政者の性質によって、次のように大別して、それぞれの時代の日本語教育政策について見てみたいものである。

- (1) 日本占領時代 (1895-1945年)
- (2) 蒋家統治時代 (1945-1988年)
- (3) 台湾人総統時代 (1988-現在)

(一) 日本占領時代

日本占領時代 (1895-1945年) の日本語教育政策は懐柔政策に強制政策であった。

1. 懐柔政策

日本領台後、最初は伊澤修二が学務部長に任命され、日本語普及事業に励んだ。『台灣十五音及字母表』『台灣十五音及字母詳解』の作成、書房などによる漢文教育の続行、土語講習所の設置、国語学校土語専修科の設置などで分かるように、初期の日本語教育はいわゆる「土語」を重視し、台湾語を生かして日本語教育を普及させようとする意図であった。そして、台湾公学校規則により、日本語と台湾語との対照による教授法が取られた。台湾語・日本語の二語併用教授法から見れば、日本領台初期の日本語教育は懐柔政策であった。そういう日本語教育の懐柔政策は1943-1945年の義務教育時代に似たようなもので、また、陳秋菊などの反日人士や原住民に対する政策と同質のものである。

2. 強制政策

しかし、いかに台湾語を生かしたといっても、日本占領時代の教育の目的は「国語教育」の名義で行われた日本語教育であり、差別教育でもあった。学習者の母語である台湾語と目標言語である日本語を使う二語併用教授法から、目標言語の日本語しか使わない直接教授法に変わったことを見ても、その本質が分かるのである。また、日本人、台湾人、原住民を別々に分けて教育を施したことを見ても、その本質が明らかである。

当時の台湾人に対する日本語教育は教師中心か国中心で、学習者個人の成長のための教育というよりも、台湾統治者に有利な、台湾人を日本人に

養成しようとするのがその目標であった。言い換えれば、強制的教育であった。例えば、学校で台湾語を話したら先生に殴られ、そして台湾人がよく日本人に「チャンコロ（清國奴）」という言葉で罵られたことで分かるように、当時、台湾語、台湾人が馬鹿にされたと同時に、日本語教育が正当化され、強制的に実施されていたのである。一部の日本人は、日本領台時代に余分な富力を持たない日本が台湾で力のかぎりのことをやった、と評価したが、それは本当に台湾人のための施政だったのか、問い質したいものである。

残念なことに、台湾は二度にわたり、そういうような無残な政策を課され、むごい教育を受けさせられていた。蔣家統治時代の中国語教育も日本占領時代の日本語教育と同じような性質を持っているものである。どちらも生徒が台湾語を喋ったら罰せられ、罵り言葉を掛けられた。異なっただけで、日本占領時代では「チャンコロ」と言われ、蔣家統治時代では「植民根性」「日本奴才」と言われたことである。

（二）蔣家統治時代

蔣家統治時代（1945－1988年）の日本語教育は禁止政策の後、緩和政策を取ったと言える。

1. 禁止政策

中国から台湾に逃げて来た国民党政府は、最初から日本語禁止政策をとった。その中身は、日本式街道名称改正、新聞日本語版禁止、学校における日本語使用禁止（生徒の日本名使用禁止を含める）、日本語書籍販売禁止、日本語看板禁止、大学における日本語必修科目禁止、日本語歌禁止、日本語放送禁止などいろいろあった。1987年2月6日になっても、番組制作規範により、日本語による日本女優古手川祐子のインタビューの日本語の部が放送禁止にされた。

228事件で多くの俊才を失った台湾では、このような日本語禁止政策について、台湾語禁止政策がとられ、終戦後の長い間、台湾人エリートの公での発言権が奪われるような結果になった。

2. 緩和政策

蔡（2003b：11）によれば、終戦の1945年からしばらくの間、台北帝国大学より改名された台湾大学では日本語が必修科目のままであったが、1948年10月になると、日本語が選択科目として他の外国語と並ぶようになった。1952年に補習班での日本語教育が解禁された。そして、1963年から台日国交断絶の1972年までの間に、大学部日本語学科が4つ（中国文化学院、淡江文理学院、輔仁大学、東呉大学の四つの大学における東方語文組）、大学院修士課程が1つ（中国文化学院日本研究所）できた。

その他に、1968年9月、国防語文学校日本語クラスの設立が許可された。1980年、国立台中商業專科学校応用外語科設立が許可され、国立専門学校で初の日本語科が成立した。そして、東呉大学日本文化研究所修士課程設立が許可され、1968年に募集し始めた中国文化学院日本研究所に次いで、二つ目の日本語文関係の修士課程であった。1983年、淡江大学日本研究所修士課程が設立され、三つ目の大学院修士課程になった。1986年、初の中高等教育日本語科－育達商業職業学校商用日文科設立が許可され、また、放送大学「空中大学」における日本語の授業が開講した。

学校教育とは別に、1979年10月に中華民国日本研究学会が創立された。11月16日に、行政院「加強外國語文訓練培養實務人才實施計畫要點」が通過した。1980年8月に、中華民国日本研究学会日本語教育シンポジウムが開

催され、戦後初めての台湾日本語教育に関する学術会議であった。それから、同じ1980年から、日本映画が一部解禁された。1981年、教育部管轄教育ラジオ放送局で日本語講座が開始した。そして、公務員日本語クラスができるようになった。更に、1981年12月に、行政院新聞局雑誌『光華』の日本語版が発行された。1982年に国防部管轄の復興ラジオ放送局での日本語講座が開講した。役所関係の日本語人材養成班は、1983年に財政部で、1985年に經濟部で、1988年に環保署で、というように相次いで設けられた。

このように、蒋家統治時代では、父の蒋介石時代（1945-1975）は禁止政策が主流であったが、子の蒋経国時代（1975-1988）は緩和政策が主流だったと言える。

（三）台湾人総統時代

1988年以降の台湾人総統の時代になると、台湾日本語教育はますます開放政策が実施されるようになった。しかし一部、規制政策も見られるのである。

1. 開放政策

まず、大学日本語教育を見てみよう。1989年に国立大学初の日本語組-国立政治大学東方語文学系日文組の設立が許可されて以来、大学・学院における日本語文学科、応用日本語学科、大学院修士課程が続々と増設された。2006年2月現在では、大学・学院において、日本語関係学科が44、修士課程が13、博士課程が1ある（資料1参照）が、台湾人が総統になった1988年から2006年2月現在まで設立されたのは、関連学科は39学科、修士課程は10課程、博士課程は1課程である。表1の「台湾の大学・学院における日本語教育機関数の変遷」に見るように、蒋家統治時代とはずいぶん違った日本語教育事情を呈している。

（表1）台湾の大学・学院における日本語教育機関数の変遷

	日本語関係学科	修士課程	博士課程
蒋家統治時代 (1945年—1988年)	5	3	0
台湾人総統時代 (1988年—現在)	39	10	1
合 計	44	13	1

そして、1993年6月19-20日、東呉大学で初めての大学日本語教育国際シンポジウムが開催された。また、「大一外文」課程実施により、大学で日本語の授業が「大一外文」の一環になっている。1994年2月7日に「師資培育法」の発布により、大学における日本語教師養成の教職課程がスタートした。

一方、1989-2002年の間に日本教育関係学会が6つも創立された。それから、1994年9月に日本語テレビ番組が解禁され、日本語が高校生、大学生の人気科目になり、若い人の間に「哈日族」が生まれるようになった。高校日本語教育では、1997-1999年に「教育部推動高級中學選修第二外國語文實驗計畫」、1999-2004年に「教育部推動高級中學第二外語教育五年計畫」、2005年より「推動高級中學第二外語教育五年計畫第二期」が実施された結果、学習者が増える一方である。そして、などの資料によれば、2006年

2月現在では、138校の普通高校で日本語教育が実施され、569クラスの19,877人の高校生が日本語を習っている。図1.2.3を見て分かるように、高校数、クラス数、学習者数のどれから見ても、他に開設されているフランス語、ドイツ語、スペイン語などの第二外国語よりずっと多い。

2. 規制政策

しかし、日本語開放と言っても、台湾社会ではいまだに「アンツ日本語」派が存在している。2003年10月10日、日本より帰国した華僑代表羅王明珠が国慶節記念大会で日本語で挨拶したことで、強く批判を浴びた。また、グローバル化の世界情勢の中で、英語教育がやはり外国語教育の主流である。その影響で、新世紀に入ってから日本語学習者はだいぶ減少し

つつある。2003年の学習者数は128,641人で、1999年の学習者数192,015人に比べて63,374人も減っている。

特に、2002年に行政院の「挑戦2008國家計畫」が發布・実施されて以来、「国際化＝英語化」「外国語＝英語」という主流思潮のあおりを受けて、大学における日本語履修規制がますます強まってきた。もともと「大一外文」という授業で自由に自分の好きな外国語を履修できたところを、ある程度英語力を持たないと、英語以外の外国語（いわゆる第二外国語）を勉強することが許されなくなった。東呉大学はその例の一つである。1993年よりずっと自由選択できた新入生の日本語履修は、94学年度の2005年秋より、「通過全民英檢中級初試或英文學測、考試入學成績達頂標者，得選修大一英文或其他外文（日、德文）」というように条件付きとなった結果、新入生のために設けられた「日本語（一）」という科目の履修者がだいぶ減ってきた（図4を参照されたい）。

四、日本語教育政策に見る台湾人の日本観

今日の台湾における日本観が多様化している。それは、各世代が経験した日本語教育政策が違うからだと思われる。まず、2006年現在の台湾日本語教育政策から見てみよう。2006年現在、154校ある台湾の大学のうち、日本語関係学科が設けてあるのは42校の44学科、日本語文研究関係修士課程は13コース、博士課程は1コースある。終戦後の皆無状況に比べると、まさに日本語ブームと言えよう。こういう日本語教育ブームに至る理由は、まず台湾人総統時代の日本語教育開放政策を取り上げなければならない。そして、日本文化に憧れる学習者の存在も無視すべきではない。勿論、日本語教育に力を入れている多くの関係者のことも忘れてはいけない。台湾の日本語教師、関係者、学習者にとっては、日本は文化大国であり、文明国であり、先進国であり、また台湾の見習うべき国でもあろう。

前述したように、台湾の日本語教育政策は日本占領時代（1895－1945年）は懐柔政策に強制政策、蔣家統治時代（1945－1988年）は禁止政策に緩和政策、台湾人総統時代（1988－現在）は開放政策に規制政策である。一体、各時代のそれぞれの日本語教育政策からどのような台湾人の日本観が構築されたのか、述べてみたい。

（一）日本占領時代の場合

日本占領時代に生まれ、国語として日本語を学んで、今日でも日本語を使用している人のことは日本語世代と言われる。そういう日本世代は日本、そして日本語についてどう思うのか、見てみよう。

- (1) 「你的國語(日本語)講得比我還標準，作夢也沒有想到你是台灣兵。
」那病少尉忽地滴下眼淚，羞愧萬分地說。（葉石濤（1990：41））
- (2) 兵の日は反日なれど短歌を詠む今は親日の我の不思議さ
（黄得龍作、孤蓬万里編（1995：377））
- (3) 日本語を知るは悲しきふるさは植民されし傷痕ありて
（陳秀喜作、李魁賢編（1997：201））

上の例（1）で見たように、日本時代に植民地政府の教育政策によって、国語教育としての日本語教育を受けて、日本人と間違えられるほど、極めて日本語が上手な台湾人もいた。そして、吳守禮が「台灣人語言意識的側面觀」（1946年5月21日、台湾新生報）で述べているように、日本占領時代末期において、中年の人々の多くは日本語を話し、日本語の本を読み、日本語を書くことができ、日本語の文法で考えることもあった。また、閩南語、客語、原住民語に入って、その語彙内容を充実させた日本語も少なくない。特に記すべきなのは、日本語普及のために、台湾の各語族に共通語ができたし、台湾にしながら日本文化、西洋文化の吸収、伝播ができた、ということである。しかし、当時の強制的日本語教育は公的社会は日本語、私的社会は台湾語、という二重言語社会を作ったのは事実である。また、懐柔政策を執ったのも日本国のためで、台湾人のためではなかった。ゆえに、反日人士が多かった。但し、例（2）のように、若いときに反日した人で、年をとると日本語、日本に親しみをを感じるものも見られる。勿論、陳秀喜女史のように、日本人作家堀口大学氏に、日本語がうまいね、と褒められると、例（3）の和歌を読んで、被植民の体験が忘れられない気

持ちをあらわした人もある。

ちなみに、日本領有になって43年も経った1937年に国語家庭制度が実施されたことを見ても分かるように、当時、台湾人家庭では日本語ではなく、台湾語が依然として意思疎通の主な道具であった。しかし、植民政府のむごい政策で、教育制度によって、台湾人は日本語のことを「国語」と呼んで、それを習って、使っていた。

現在でも、日本占領時代生まれの年配の人は、昔を懐かしむ気持ちで日本語を使ったりするのが多いのではないと思われる。そういう人たちにとっては、日本語・日本は子供時代の思い出であろう。この日本時代を体験した日本語族のことはよく親日派と言われるが、実際は、いくら当時が辛くとも歳月が経つに連れて辛さが忘れられ、懐かしさが一層増すのは人間の常であろう。つまり、親日派であるというよりも、自分が青少年時代に接した日本語、そして日本に対する思い出を大事にするだけのことなのではなかろうか。

(二) 蔣家統治時代の場合

残念ながら、こういう日本占領時代生まれの人たちのことをとやかく、「日本奴才」「植民根性」とけなすものがある。そのほとんどが国民党政府について中国から台湾に移った（逃げてきた？）ものかその子孫、あるいは国民党系の関係者である。蔣家統治時代はいわゆる国語運動を行って、古くから台湾で使われてきた言語の公における使用権を奪ったが、多くの中国からきたものが喋った中国語は、学校教育で教えている中国語とはずいぶんかけ離れた言葉である。例えば、蒋介石、蔣経国の喋った言葉はいわゆる国語しかできないものにとっては、完全には理解できないはずであった。蔣家統治時代の日本語禁止政策は分からないものではないが、しかし、台湾人が長い間使ってきた台湾語（閩南語、客語、原住民語）をも「方言」として禁止したのはやはり、中国本位の考え方によるものしか思えない。長い間、日本語禁止令が次から次へと出されたのはつまり、当時の日本語使用の社会状況の現われであったろう。禁じられてもっと日本語を喋りたい、国民政府への不満を晴らすために日本語を使いたい、という鬱憤さは経験者でないと理解できないのではなかろうか。

中国本位なので、中国語を普及させたい気持ちが分かるが、しかし、なぜ、英語と同じような眼差しで外国語として日本語を見ることができなかったのであろうか。それには、当時台湾人エリートの意思疎通の道具としての日本語をその母語の台湾語と一緒に禁止したことで、国民党政府の一刻も早く台湾全島を制圧したいという焦りが感じられてならない。また、共産党に負けて台湾に逃げてきた蒋介石は責任逃れで日本を敵に回した方が好都合であろう。日本敵視の心理は1972年の台日国交断絶の際、いっそう盛り上がったわけである。国民党政府が中国を失ったのは日本侵略による「八年抗戦」のせいで、その「以怨報徳」の「日本鬼子」が今度「以德報怨」の中華民国を捨てて中国共産党と手を繋ぐのだから許せない、という心理だったと思われる。そして、「日本敵視＝日本語敵視」という結果になったと言えよう。そういう心理には政治的考慮が入っていると思われる。世間ではよく政治は政治、学術は学術、と言われるが、本当に割り切って考えられるものか、疑問である。

但し、禁止色の強いなかにながら、日本語教育に力を入れた関係者が多くいた。まず、日本占領時代に生まれ、日本語を習得して日本語教育に従事した教師のことが挙げられる。その教師たちは政治情勢を構わず、教

育に身をささげたのである。そして、その教師たちが養成した、1963-1972年に設立された中国文化大学、淡江大学、輔仁大学、東呉大学の日本語文学科出身の人は現在、日本語教師として台湾日本語教育の中堅になっている。

振り返ってみれば、まだ日本語禁止色の強かった時代に日本語を勉強することで、肩身の狭い思いをされていて大変であった。いろんなところに掲げられている「日本産品を買うな、日本語を喋るな」という日本ボイコットの標語の文字を胸に刻みながら、日本語を専攻する学科でありながら東方語文学科と名付けられた所に通っているものの虚しさは考えるだけでも悲しいものであった。また、教室以外に日本語環境が一切ないし、教材も不足していた。その代わり、先生方は真面目で精いっぱい頑張った。そういう先生方の努力がなければ、今日の台湾日本語教育の盛況がないに決まっている。そして、日本経済の繁盛で、その力を無視できない台湾政府はつい、日本語教育緩和政策を打ち出さなければならなかった。国立台中商業専門学校日本語組の設置、役所関係の日本語人材養成班の創立などで分かるように、経済力の強い日本は台湾にとって不可欠の経済的仲間であり、模範でもある。

(三) 台湾人総統時代の場合

1990年代に入ってから、禁止政策や緩和政策の時代とは違って、衛星放送や海外観光ブームのおかげで、日本文物と接触する機会が増え、日本文化に憧れる若者が現れ、「哈日」（日本大好き）という言葉までできた。日本という国や日本語という外国語に対して積極的な関心を持つ人も勿論いるが、全員そうとは限らない。つまり、いわゆる「哈日族」は日本の歌やファッション、娯楽といった、日本の若者文化に向いているのが多いのである。そして、できることなら、日本語をいじりたい気持ちもあるためか、高校でも大学でも日本語科目が大人気になった。そういう趨勢が日本語開放政策と相俟って、今日の日本語教育普及の現象をもたらしたのではないか、と思われる。

2005年4月29日の日本政府春の叙勲に、めでたく台湾の蔡茂豊博士が旭日中綬章を受賞した。日本語教育に寄与してきた功績が認められて、1972年に台日国交が断絶して以来、台湾人初めての受賞なので、まさに、台湾日本語教育界の記念すべき一大盛事である。これは、台湾の日本語教育、日本語ブームが日本に認識されていることを如実に物語っていると思われる。

そして、日本語ブームと相俟って、日本に対する憧れの心理を抱いて日本訪問の台湾人観光客が増える一方である。2004年では、159万人の韓国人観光客に次いで、台湾人観光客が108万人あったためか、日本政府は、愛知万博開催の2005年3月から、台湾人観光客に対しビザ免除の措置を取っていただけではなく、2005年8月から恒久免除にしている。日本行きに抵抗感がないことは、台湾人の日本観の表われの一つとも言えよう。そして、その背後には、日本語教育の開放政策に関係していると思われる。

但し、今日の台湾において、英語第一の風潮と共に、依然として中国本位思考様式で日本、日本語をよからぬものと思うものはまだいるので、日本語教育政策には相変わらず規制色が見られるのである。そして、長期にわたる国民党政府のアンツ日本、日本語敵視という外国語教育政策によって、日本語学習が制限され、反日意識が今日でもよく見られる。以下、国民党政府の教育効果とも言えるような反日意識に関する事例について見て

みよう。

1. 周杰倫コマーシャル事件

2005年4月、台聯黨所属立法委員日本靖国神社参拝によって、台湾国内で反日運動が起こった。そのあおりを受けて、歌手の周杰倫が一部のファンに、日本商品のコマーシャルに出るな、と言われたのである。

2. 馬英九反日報道事件

2006年2月1日に出版された日本の月刊「諸君！」三月號に、馬英九が胡锦涛より反日である、という主旨の日本中央大学近代日中関係専門家水谷尚子氏による文章が載っている。2月10日、国民党主席馬英九は、台北駐在の日本人記者を集め、「国民党が大陸（中国）と反日で共同歩調をとっているとの報道は本意だ。私は刺し身も大好きだ」、と自らが反日主義者だとの見方を否定した。

3. 烏來郷高砂義勇隊慰靈記念碑事件

2006年2月8日、日本人の寄付金の助けによって、台北縣烏來郷の「高砂義勇隊慰靈記念碑」が烏來環山路瀑布公園に移された。しかし、第二次大戦期間に日本軍として海外で犠牲になった台湾人原住民を記念するためのこの記念碑が、日本語で書かれたがゆえに、烏來公園が日本に占領された、と一部のマスコミによって報道された。2月19日、台北県長の周錫瑋が、烏來が日本ではない、と義勇軍遺族及び日本人観光客と口論した。そして、2月24日に「高砂義勇隊慰靈記念碑」が取り除かれた。

5. 結び

台湾人は、世代が違えば日本、日本語に対する感覚も異なる。多種多様の価値観なので台湾における日本観は多様化していて、なかなか整理しにくい、本稿では、次のようにまとめてみたいものである。

- (1) 日本占領時代は一時、懷柔政策で日本語教育を行ったものの、植民地政権の強制的な手法で実施した差別教育なので、日本来台45年目の1940年の日本語普及率が51%に達したと言っても所詮、日本は外来政権のままであった。但し、そういう日本語教育を受けた人で、最初は「反日派」であったが、年をとるにつれて子供時代、少年時代への懐かしみで日本語、そして日本に好意を持つようになった人が多い。
- (2) 蔣家統治時代に、日本語教育を受けたことのない人は、国民党の反日教育の結果、殆ど「愛国者」と思われる「反日派」である。そして、禁止的政策下の日本語教育を受けた人はもともと、反日教育のせいで日本嫌いが多かったが、日本語を勉強することによって、一応日本を理解できる「知日派」になった人もいる。
- (3) 台湾人総統時代に、開放政策で日本語に接する機会が増えて、また戦争の記憶が遠のいて、若者の殆どが過去を構わないため、日本語教育を受けようが受けまいが、文化大国である日本を嫌うものは多くなかろう。但し、上層階級にいて力を握っている管理者の一部は、蔣家時代の記憶がまだ強く、未だに規制政策で日本語教育を主事したいものも少なくはない。全体的に言えば、「哈日族」「知日派」もあれば、「反日派」もある。

ちなみに、国民党来台の46年目の1991年の台湾において、中国語普及率は90%であった。蔣家統治政権に圧迫された結果、多くの元台湾語家庭では、おじいさん、おばあさんが孫の話を聞いて分からないし、孫がおじい

さん、おばあさんの話を聞いても分からない、というようなことが見られる。そして、似ているようなことであるが、1945年から1963年の間、禁止政策によって日本語教育が途絶えたため、台日交流に欠かせない日本語人材に断層ができたわけである。

1895年から今日まで110年に亘る台湾日本語教育であるが、転々と変わった教育政策により、台湾人の日本観は多重人格者のように多様化している。今は自由民主の台湾のことだから、当たり前のことであろうが、やはり、21世紀は多文化共生の時代であるので、国際視野をより広くして、もっと平等に各外国語を見るべきではなかろうか。人間本位で生徒や学生が自由自在に自分の好きな外国語を選択して学べるように、台湾の外国語教育は何の規制もされずに、偏りない開放政策の下で行われることを願ってやまない。そして、台湾の国民の多くがもっと日本や台日関係を理解できるように、日本語教育に携わっている関係者は、日本語教育の普及やレベルアップを目指して、今後いっそう頑張らなければならないと思われる。

総合大学	科技大学、技術学院
<u>大学部</u> 中國文化大學日本語文學系 淡江大學日本語文學系 輔仁大學日本語文學系 東吳大學日本語文學系 政治大學日本語文學系 東海大學日本語文學系 台灣大學日本語文學系 銘傳大學應用日語學系 真理大學應用日語學系 元智大學應用外語學系 靜宜大學日本語文學系 大葉大學應用日語學系 慈濟大學醫學院東方語文學系日文組 義守大學應用日語學系 長榮大學應用日語學系 世新大學日本語文學系 真理大學日本語文學系 中華大學外國語文學系日本語文組 中山醫學大學應用外國語言學系日語組 <u>大学院修士課程</u> 中國文化大學日本語文學研究所 東吳大學日本語文學系碩士班 淡江大學日本研究所 輔仁大學日本語文學系碩士班 銘傳大學應用語文研究所日語組 台灣大學日本語文學系碩士班 政治大學日本語文學系碩士班 長榮大學日本研究所 大葉大學應用外語研究所日文組 東海大學日本語文學系碩士班 淡江大學日本語文學系碩士班 <u>大学院博士課程</u> 東吳大學日本語文學系博士班	<u>大学部</u> 台中技術學院應用日語系 文藻外語學院日本語文科 和春技術學院應用日語系 高苑科技大學應用外語系日文組 東方技術學院應用外語系日文組 南榮技術學院應用日語系 景文技術學院應用日語系 中州技術學院應用外語科日文組 環球技術學院應用外語科日文組 親民技術學院應用外語科日文組 高雄第一科技大學應用日語系 南台科技大學應用日語系 淡江大學技術學院應用日語系 大仁科技大學應用外語系日文組 吳鳳技術學院應用外語系日文組 育達商業技術學院應用日語系 立德管理學院應用日語學系 致遠管理學院應用日語學系 興國管理學院應用日語學系 屏東商業技術學院應用日語系 修平技術學院應用日語系 明道管理學院應用日語學系 稻江科技暨管理學院應用語文學系 開南管理學院應用日語學系 致理技術學院應用日語系 <u>大学院修士課程</u> 高雄第一科技大學應用日語系碩士班 南台科技大學應用日語研究所

(資料1) 台湾の大学・学院における日本語教育 (2006年2月現在)

後記：

本稿は2005年9月10日「天理台湾学会第15回研究大会」において「台湾の日本語教育政策に見る台湾人の日本観」という題で口頭発表したものを骨子に大幅に加筆したものである。

引用出典：

孤蓬万里編『台湾万葉集続編』東京：集英社、1995年
葉石濤「飢餓的兵隊」『台灣男子簡阿洵』台北：前衛出版社、1990年
李魁賢主編『陳秀喜全集9追思集』新竹：新竹市立文化中心、1997年
『自由時報』『大紀元時報』『日本経済新聞』
『教育部電子報』ホームページ：<http://epaper.edu.tw/104/number.htm>
『東森新聞報』ホームページ：<http://www.ettoday.com>

参考文献：

王育徳著・黄國彦譯『台灣苦悶的歴史』台北：草根出版、1999年
何義麟「戦後初期台灣日文報刊之流通與管制」『2005年東海大國際會議—『日本語』在台灣、韓國、沖縄做了什么?』予稿、台中：東海大学、2005年
金美齡、深田祐介『鍵は「台湾」にあり』東京：文藝春秋、1996年
黄宣範『語言社會與族群意識』台北：文鶴出版、1995年(2004新版)
孤蓬万里編『台湾万葉集』東京：集英社、1994年
呉密察監修・遠流台湾館編『台灣史小辭典』台北：遠流出版社、2000年
蔡茂豊a『台湾における日本語教育の史的研究（上）』台北：大新書局、2003
蔡茂豊b『台湾における日本語教育の史的研究（下）』台北：大新書局、2003
司馬遼太郎「台湾紀行1流民と栄光」『週刊朝日』7/2号、東京：朝日新聞社、1993年
史明『台灣人四百年史(漢文版)』サンーホセ：蓬島文化公司、1980年
莊隆福『台湾の言語文化史論』台北：旺文社、1996年
台灣教育會『台灣教育沿革誌』1939年(1995年復刻、台北：南天書局)
谷口龍子『台湾における日本語教育事情調査報告書平成11年度』東京：財団法人交流協会、2000年
趙天儀「台灣文明的過去與現在」『台灣文學的週邊』台北：富春文化、2000年
張博宇編『台灣地區國語運動史料』台北：台灣商務書店、1972年
藤井彰二『台湾における日本語教育事情調査報告書平成15年度』東京：財団法人交流協会、2004年
方師鐸『五十年來中國國語運動史』台北：國語日報社、1965年
賴錦雀「台湾における『哈日』現象と日本語教育」『天理臺灣學會年報』第11號、65-73頁、奈良：天理台湾学会、2002年
賴錦雀「台湾日本語教育年表(1895—2005年)」『日本学と台湾学』4号、台中：靜宜大学日本語文学科、2005年